

水文化からみる東根 —水を活かし守り続けるために—

井上 亮子

2022年にイバラトミヨの特殊型「カクレトミヨ」が山形県東根市の魚に制定された。カクレトミヨは藻が茂る緩やかな清流にしか生息しないため、生息地の小見川は良質な環境が整っているといえる。さらに、東根の特産品である「六田麩」を作るには豊富な水が欠かせず、同じく特産品の本わさびやニジマスも小見川の水で育てられるため、東根においては豊かな水文化が形成されていると考えられる。しかしながら、地域の若者は学校教育でその水文化について学び、認知はしているものの、関心が薄れてきている。

本論文の目的は、東根における水文化の現状について、カクレトミヨの保全活動や水に関わる食文化やそれを活かした地域の取り組みを調べることで明らかにし、全国の水文化を活かした地域づくり事例を参考にしながら、水環境・水文化を守っていくための取り組みを提案することである。研究方法は、文献、資料、インターネットによる調査、および市内において水文化と関わっている「文四郎麩」「杜のCAFÉ」「大富イバラトミヨを守る会」「Café Bell Tree」へのインタビューによる。

その結果、手のかかる六田麩は若者に浸透しておらず、そのためには斬新な切り口が必要であること、希少生物であるイバラトミヨ・カクレトミヨは簡単に人と触れ合わせるわけにはいかないので、生物を守りながら興味・関心を惹く活動を行わなければならないこと、そしてその保全活動も高齢化しているために、水環境を守るために地域全体の意識を高め、活気づける必要があることが明らかになった。

そして、その課題の解決策として、東根の未来を担う若者にも関心を寄せてもらえるように、六田麩の体験型博物館ブースを設置すること、生物や環境を守るための小見川清掃ボランティアのほか、SNSを活用した魅力発信を提案した。豊かな水環境とそれにより受け継がれた特産品や文化を後世に伝えていくことで、次の世代にも身近に感じてもらえることだろう。